北野武監督作品「HANA－BI」＝写真＝の快挙にはみんな浮かれた。が、「世界の北野」になる予感はすでにあって、彼の「ソナチネ」がパリで公開となるや、映画関係者はこぞって北野武に心酔した。それまでは小津安二郎を語れば、日本映画が語れるといった調子であったが、あっという間に『オヅ』『キタノ』と続けて言うようになった。イタリアでは、ビートたけしとしての「風雲たけし城」がすでに放映されていると聞くが、フランスでも放映すればいいのに。しかし、テレビでの顔と彼が監督した作品とのギャップが大きいことにも驚くことだろう。

このへんのことについては、「キッズ・リターン」がカンヌ映画祭の監督週間部門にノミネートされた時から、しっかりと宣伝プロデュースをし、監督自身からも信頼の厚いR・T氏が言っていた。

映画監督・北野武としてのビートたけしは実にナイーブで、スタッフへの思いやり、気の遣い方など実にこまやかな神経の持ち主なのだそうだ。適切な仕事ぶり、人間味あふれるチームワークを実践し、高ぶったところなど皆無だともいう。そういう彼の計算ずくではない映画の作り方が、ヨーロッパの映画関係者をうならせているのだとも思う。

北野監督と宣伝マン

ベネチアでのインタビューは72件だったというが、これらに応える時は、徹頭徹尾、北野武として応じ、北野自身、そのことを至福のこととして感じていたそうだ。これらインタビューの対応や上映までのアピール、映画をヒットにまで持っていくのを一手に仕切るのがT氏の役目だが、ベネチアでの賞の発表前の微妙な時間帯には、北野監督を思いやって日本のメディアのインタビューをアレンジするなど細かい工夫をしたという。

その彼も監督のわきを固めているため、いくつかのメディアに顔を出す結果となったようで、「フォーカス」誌でベネチアングラスを「吹いて」作ろうとしている監督の隣のナゾの日本人（！）として登場してもいた。彼に言わせると、これは宣伝マンとしては「大失態」なのだそうで、黒子がエラそうにスターの横にいるなんて恥なのだ……と、奥ゆかしくもそう言っていた。

（高野てるみ／映画プロデューサー・巴里映画代表）